

Jane Austen の英語における受動態

The 'Passive Voice' Construction in Jane Austen's English

末 松 信 子

Nobuko SUEMATSU

要旨

19世紀初頭の Jane Austen の受動態を調査し、受動態をつくる助動詞には be 動詞以外にも、*get*, *stand*, *become*, *seem*, *appear*, *look*, *remain*, *grow* 等が用いられていること、近代英語期に広まったとされる間接目的語を主語にした 'He was given a book' 型受動態や前置詞の目的語を主語にした 'He was laughed at' 型受動態が頻繁に用いられていること、18世紀までは極めて稀であったとされる連語の受動態 'He was taken care of' 型がしばしば用いられていること等を明らかにした。

キーワード

ジェイン・オースティン、受動態、19世紀英語、シンタックス

I

英語には能動態 (active voice) と受動態 (passive voice) の2つの態がある。受動態は古英語 (OE) より存在し、「助動詞 (be ほか) + 過去分詞」形によって、主語がある動作を受けることを表す。受動態の基本的な機能は OE より現代英語に至るまで変わらないが、二重目的語構文における間接目的語を主語にした受動態 ('He was given a book') や、前置詞の目的語を主語にした受動態 ('He was laughed at', 'He was taken care of') が頻繁に用いられるようになったのは近代英語期に入ってからである。また、受動態進行形 ('The house is being built') や動作受動態 ('I got hit by a car') は17世紀に初出すると言われている。小論では、それから1世紀後の18世紀末から19世紀初頭にかけて執筆活動を行った Jane Austen (1775-1817) において、これらの構文がどの程度発達しているのかを明らかにしたいと思う。以下、§3.1 受動態助動詞、§3.2 二重目的語構文の受動態、§3.3 'He was laughed at' 型構文、§3.4 'He was taken care of' 型構文の順で見てゆく。なお、動作主は、特定のイディオムを除いて常に *by* であるので、ここでは特に取り上げない。また、受動態進行形については別稿にゆずる。小論において使用した刊本は、R. W. Chapman (ed.), *The Oxford Illustrated Jane Austen*, Third Edition, 5 vols. (London: Oxford University Press, 1932-34) である。各作品の略称、刊行年代は次の通りである。SS = *Sense and Sensibility* (1811), PP = *Pride and Prejudice* (1813), MP = *Mansfield Park* (1814), E = *Emma* (1816), NA = *Northanger Abbey* (1818), P = *Persuasion* (1818)

II

まず、受動態の発達過程を概観してみる。

Mustanoja (1960, pp. 438-39) によれば、英語の受動態は「助動詞 + 過去分詞」によって構

成され、OE における受動態の助動詞は *wesan*, *beon* および *weorðan* である。*wesan*, *beon* は状態を表す一般的な助動詞であるが、動作受動態 (actional passive) を表すのにもしばしば用いられた。しかし動作受動態を表す場合、*weorðan* を用いるのがより一般的であった。ME でも引き続き助動詞は *be* (< OE *wesan*, *beon*) と *wurthe* (< OE *weorðan*) であるが、11 世紀以降 *wurthe* は稀となり、14 世紀の終わり頃には廃れてしまう。今日 *be* と競合する主な受動態助動詞は *get* である。Denison (1998, p. 181) によれば、*get* を助動詞とする動作受動態 ('get taken') は 17 世紀に初出し、19 世紀の初めまでには一般的となっていた。*be*, *get* 以外では *appear*, *become*, *fall*, *grow*, *look*, *remain*, *seem*, *stand*, *stay* 等が過去分詞を伴い、「受身」の形式で用いられる。*stand* は OE より、*fall*, *become*, *seem* は ME より、その他 *appear*, *grow*, *look*, *remain*, *stay* は近代英語期に入って用いられるようになる。また、Denison (1998, p. 182) は、今日では、*get* 以外の *become*, *fall*, *grow*, *remain*, *stay* は動詞的な分詞とは結びつかなくなりつつあるという。

二重目的語構文の受動態のうち、間接目的語を主語にした 'I was told a story' 型の受動態は、初期中英語期にすでに見られるが、自由に用いられるようになるのは 16 世紀になってからである (Trnka 1930, p. 62)。また、前置詞の目的語を主語にした 'he was laughed at' 型の受動態は 1300 年ごろに現われるが、14 世紀終わりまではまだ稀であった (Mustanoja 1960, p. 441)。Trnka (1930, p. 62) によれば、16 世紀前半になってしばしば用いられるようになり、16 世紀後半には現代英語に近い状態に達していたという。'He was taken care of' 型の成句の受動文は、15 世紀に出現するが (Denison 1993, p. 154)、小野・伊藤 (1993, p. 1354) によれば、18 世紀までは全く稀であったという。

これらのことを踏まえて、Austen の用法を観察する。

III

3.1 受動態助動詞 (passive auxiliary)

英語の受動態は「助動詞＋過去分詞」によって構成される。OE 以来今日まで、受動態をつくる助動詞は *be* が最も一般的である。

(1) Before he could return to his chair, it *was taken* by Mrs. Weston. (E, p. 222)

(2) the charm *was broken*. (P, p. 214)

OE には動作受動態を表す動詞として *weorðan* も用いられていたが、14 世紀の終わり頃までには廃れた。Denison (1998, p. 181) によれば、今日 *be* と競合する主な受動態助動詞は *get* である。OED (s. v. Get v. 34. b.) の挙げる初出例は 17 世紀半ばの次のものである。

1652 年 Gaule *Magastrom*, 361 A certain Spanish pretending Alchymist . . . *got acquainted* with foure rich Spanish merchants.

ただし Denison (1993, p. 420 & 1998, p. 320) は、*acquainted* は補語とも考えられ、曖昧であるとして、次の例がより適切であるという。

1693 Powell, *A Very Good Wife* II. i p. 10 [ARCHER] I am resolv'd to *get introduced* to Mrs. Annabella;

いずれにしろ 17 世紀後半に初出するということになる。同じく Denison (1998, p. 181) によれば、*get* による受身は 19 世紀の初めには一般的となっていたが、多くの場合、「状態の変化を表す変移動詞 *get* + 状態を表す分詞形容詞」という別の解釈も可能であると言う。Quirk et al. (1985, § 3.66) は、今日、*get* による受身は形式ばった文体では避けられると述べている。

Austen には「*get* + 過去分詞」構文が 23 例見られる。そのうち 14 例が '*get acquainted (with)*' であり、残りの 9 例は '*get tired*' が 2 例、'*get conveyed*'、'*get engaged*'、'*get introduced*'、'*get made*'、'*get married*'、'*get tumbled*'、'*get used*' がそれぞれ 1 例ずつである。以下に数例示す。

- (3) "But Shakespeare one *gets acquainted* with without knowing how." (MP, p. 338)
- (4) "and I thought it would be more comfortable for them to be together; because if they *got tired* of me, they might talk to one another, and laugh at my old ways behind my back." (SS, p. 154)
- (5) "and I could send a little parcel by you that I want to *get conveyed* to your cousins." (MP, p. 245)
- (6) "So, he enquired who she was, and *got introduced*, and asked her for the two next." (PP, p. 13)
- (7) and she was very sure that he would be a great deal the happier for having Mr. Knightley always at hand, when he *were* once *got used* to the idea. (E, p. 466)

確かに Denison (1998, p. 181) が指摘するように、純粋な受動態といえるかどうか曖昧なものもある。しかし「*get* + 過去分詞」という形式が、19 世紀初頭の Austen で一般的な構文となっているのも事実である。

be, *get* 以外でも *appear*, *become*, *fall*, *grow*, *look*, *remain*, *seem*, *stand*, *stay* 等が過去分詞を伴って用いられる。Visser (1973, §§ 1891-93) の挙げるそれぞれの初出年代は、*appear* (1533), *become* (c1456), *fall* (c1205), *grow* (1735-6), *look* (1697), *remain* (1611), *seem* (c1380), *stand* (OE), *stay* (1640) である。Denison (1998, p. 182) は、今日、*get* 以外の *become*, *fall*, *grow*, *remain*, *stay* は、動詞的な分詞とは結びつかなくなりつつあると述べている。これらの動詞のうち、Austen では「*seem* + 過去分詞」構文は極めて頻繁に見られる。

- (8) and his complacency *seemed confirmed* by the arrangement. (MP, p. 105)

その他の動詞に関しても、*appear* 22 例、*become* 34 例、*grow* 17 例、*look* 37 例、*remain* 9 例、*stand* 2 例の過去分詞を伴う例が見られた。Denison が今日では動詞的な分詞とは結びつかなくなりつつあるとして挙げたもののうち、*fall*, *stay* の例は皆無であったが、*become*, *grow*, *remain* の例はしばしば見られた。以下動詞ごとに 1 例ずつ挙げる。

- (9) “Miss Crawford *appeared gratified* by the application.” (MP, p. 257)
- (10) Her mind did *become settled*, but it was settled in a gloomy dejection. (SS, p. 212)
- (11) She will *grow* just *refined* enough to be uncomfortable with those among whom birth and circumstances have placed her home. (E, p. 38)
- (12) Elizabeth *looked surprised*. (PP, p. 179)
- (13) He *remained* steadily *inclined* to gratify so amiable a feeling. (MP, p. 252)
- (14) “Nothing can *stand* more *retired* from the road than Maple Grove.” (E, p. 307)

Denison (1998, p. 182) も指摘するように、これらの動詞に後続する過去分詞は、分詞形容詞として補語の働きをしていると考えられるものも多い。

3.2 二重目的語構文の受動態

今日、‘I gave him the book’ のような二重目的語構文は、直接目的語を主語とした ‘The book was given him’ 型受動文と、間接目的語を主語とした ‘He was given the book’ 型受動文の二通りが可能である。何を話題にするかによって、直接目的語が主語になる場合と間接目的語が主語になる場合とがあり、一概に統語上の問題として処理できない問題もある。しかし、歴史的に見ると、本来受動文の主語となるのは対格（直接目的語）であり、与格（間接目的語）を主語にした受動文は後から発達したものである。Trnka (1930, p. 63) によれば、間接目的語受動文は初期中英語にはすでに見られるが、14 世紀後半になって比較的多くなり、16 世紀によりやく一般化する。Poutsma (1926, p. 126) も、この種の受動文は、後期中英語から初期近代英語にかけて急速に広まり、Shakespeare では完全に発達していると述べている。間接目的語を主語とする構文が発達した原因として、Jespersen (1927, § 15.2.4) は、第一に対格と与格の形態上の区別が ME 以来消失したこと、第二に物よりも人に多くの関心が向けられ、そのため人を示す間接目的語を主語とする構文が好まれるようになったことを挙げている。Quirk et al. (1985, § 16.55) によれば、今日の英語では、‘The book was given him’ 型よりも ‘He was given the book’ 型の方が頻度が高いという。

上述したように、間接目的語を主語とする受動文は、16 世紀の Shakespeare において完全に発達していた。それから 2 世紀後の Austen でも頻繁に用いられている。二重目的語を取る主な動詞 28 (*allow, ask, bid, bring, command, deny, enjoy, forbid, foretell, give, grant, leave, make, offer, order, permit, promise, provide, refuse, save, send, serve, show, spare, teach, tell, wish, write*) について調査したところ、16 の動詞に該当例が見られた。直接目的語を主語とする受動文と間接目的語を主語とする受動文の比率は次の通りであった¹⁾。

	‘The book was given him’ 型	‘He was given the book’ 型
allow	0	7
bring	1	0
deny	1	5
give	7	13
leave	2	0
make	1	0
offer	1	1
pay	3 ²⁾	1
promise	1	0
save	0	2
send	2	0
show	1	2
spare	0	13
teach	0	2
tell	3	1
wish	0	1
計	23	48

bring, leave, make, promise, send では、用例は少ないが、直接目的語を主語とした受動文しか見られず、*pay, tell* では直接目的語受動文が優勢である。*offer* では両型それぞれ 1 例ずつ見られる。しかし *deny, give, show* では間接目的語を主語とした受動文が優勢であり、また *allow, save, spare, teach, wish* では間接目的語受動文が唯一の形式である。以下、直接目的語受動文しか取らない動詞、間接目的語受動文しか取らない動詞、両型をとる動詞を 1 例ずつ示す。

<bring>

- (20) He had not left her long, by no means long enough for her to have the slightest inclination for thinking of anybody else, when a letter *was brought* her from Randall's — a very thick letter. (E, p. 436)

<allow>

- (21) “I may be allowed, I hope, the use of my judgement as well as Mr. Perry.” (E, p. 106)

<pay>

- (22) He would scarcely be ten pounds a year the loser, by the hundred that was to *be paid* them. (PP, p. 309)
- (23) “I would rather *be paid* the compliment of being believed sincere.” (PP, pp. 108-09)

このように 19 世紀初頭の Austen では、間接目的語を主語とした受動文が十分に確立しており、動詞によっては直接目的語を主語とした受動文よりも頻繁に用いられている。全体的に見

でも間接目的語を主語とした受動文が2倍以上もあり、Quirk et al. (1985, §16.55) のいう現代英語の用法に近い。

3.3 ‘He was laughed at’ 型構文

Mustanoja (1960, p. 441) によれば、前置詞の目的語を主語にした受動態 ‘he was laughed at’ 型は1300年ごろに現れるというが、Visser (1973, §1950) は13世紀初頭の例を1例挙げている。

c1225 *Ancrene Wisse* (ed. Tolkien) 58, 7, heo schal beo greattre . . . leafdiluker leoten of þen a leafdi of hames ‘She shall be . . . more highly regarded as a lady than the lady of a house’.

この ‘he was laughed at’ 型は14世紀の終わりまでは稀であるが (Mustanoja 1960, p. 441)、Trnka (1930, p. 62) によれば、16世紀前半になってしばしば用いられるようになり、16世紀後半には現代英語に近い状態に達していたという。Söderlind (1956, p. 24) も17世紀後半のDrydenには、この構文が非常に頻繁に見られるという。しかし小野・伊藤 (1993, p. 135) によれば、Lowth (1762, p. 75) は ‘we cannot say with any propriety, turning the Verb Neuter [*i. e.* 自動詞] into a Passive by inversion of the sentence, “the rock *was split upon* by the ship” と批判しているから、18世紀の規範文法家にはあまり認められなかったようである、という。

Austen の特徴の一つであると Phillipps (1970, p. 148) も指摘しているように、Austen は前置詞の目的語を主語にした受動態を非常に頻繁に用いている。‘ask for’, ‘attend to’, ‘call on’, ‘care for’, ‘depend on’, ‘laugh at’, ‘listen to’, ‘look at’, ‘meet with’, ‘part with’, ‘prevail on’, ‘send for’, ‘speak of’, ‘talk of’ など様々な「自動詞＋前置詞」からなる成句の受動態が見られ、19世紀初頭の Austen の頃には、前置詞の目的語を主語とした受動態が十分に発達していたと考えられる。以下、参考までに数例挙げる。

(24) “How was I to have an attachment at his service, as soon as it *was asked for*?” (MP, p. 353)

(25) “My dear Miss Fairfax, young ladies are very sure to *be cared for*.” (E, p. 135)

3.4 ‘He was taken care of’ 型構文

Denison (1993, pp. 153–54) によれば、‘set fire to’, ‘take advantage of’ のような成句の受動態は、³⁾ 前置詞の目的語の受動態より約150年遅れて、15世紀になって出現する。しかし Söderlind (1956, p. 26) によれば、それから約200年後のDrydenにおいてもまだ極めて稀であり、‘be done good to’, ‘be taken hold of’, ‘be taken notice of’ の3例しか見られないという。小野・伊藤 (1993, p. 135) は、連語形の受動態は18世紀までは全く稀であると述べている。19世紀初頭の Austen では、‘fall in love with’ (1例), ‘look forward to’ (1例), ‘make use of’ (2例), ‘put an end to’ (4例), ‘take care of’ (2例), ‘take notice of’ (1例), ‘do justice to’ (2例), ‘make fuss with’ (2例), ‘eat much of’ (1例) といった成句の受動態

が見られる。以下、数例のみ示す。

- (26) Mr. Allen expressed himself on the occasion with the reasonable resentment of a sensible friend; and Mrs. Allen thought his expressions quite good enough to *be* immediately *made use of* again by herself. (NA, p. 237)
- (27) “It is not that mamma cares about it the least in the world, but I know it *is taken notice of* by many persons.” (P, p. 46)
- (28) and Col. Campbell’s residence being in London, every lighter talent *had been done full justice to*, by the attendance of first-rate masters. (E, p. 164)

約 100 年前の Dryden と比べると、19 世紀初頭の Austen では、その種類も、頻度も増しており、それほど珍しい構文ではなくなっている。

なお ‘take notice of’ には 上記 (27) のような構文のほかに、下に示すような *notice* を主語とした受動文も 1 例見られた。

- (29) It was now above a week since John Dashwood had called in Berkely-street, and as since that time *no notice had been taken* by them of his wife’s indisposition, beyond one verbal inquiry, Elinor began to feel it necessary to pay her a visit. (SS, p. 293)

また ‘pay attention to’ には、‘be paid attention to’ という構文は見られず、*attention* を主語とした受動態の例が 2 例見られるのみであった。

- (30) Every distinguishing *attention* that could be paid, *was paid to* her. (E, p. 368)
- (31) They solaced their wretchedness, however, by duets after supper, while he could find no better relief to his feelings than by giving his housekeeper directions that every possible *attention* might *be paid to* the sick lady and her sister. (PP, p. 40)

IV

以上、Austen における受動態の用法について見てきた。まとめると次のようになる。

19 世紀初頭の Austen では、受動態の基本的な機能は十分に発達しており、今日と変わらない。17 世紀になって初出する *get* による受動態 (‘get taken’) も、それから約 200 年経った Austen では一般的となっている。*be, get* 以外では、OE より見られる *stand*、ME より見られる *become, seem*、16 世紀より見られる *appear*、17 世紀より見られる *look, remain*、18 世紀より見られる *grow* 等が Austen でも過去分詞を伴って用いられている。近代英語期に入ってから広まったとされる間接目的語を主語にした受動態 (‘He was given a book’) や ‘He was laughed at’ 型受動態も頻繁に用いられており、十分に確立している。また、18 世紀までは極めて稀であったとされる ‘He was taken care of’ 型受動態も Austen はしばしば用いている。19 世紀初頭の Austen において、今日見られる受動態の機能はほぼすべて出揃っていたと言える。

注

小論執筆にあたり、ご指導賜った九州大学の田島松二先生に謝意を表します。

1. 下例が示すように、名詞節が直接目的語の場合には、通常、間接目的語が主語となるので、統計から除外した。

The Coles were very respectable in their way, but they ought to *be taught* that it was not for them to arrange the terms on which the superior families would visit them. (E, p. 207)

2. 3 例中 1 例は ‘seem paid’ 形である。

She wondered that Lucy’s spirits could be so very much elevated by the civility of Mrs. Ferrars; — that her interest and her vanity should so very much blind her, as to make the attention which *seemed* only *paid her* because she was *not Elinor*. (SS, p. 238)

3. Denison はこの種の受動態を ‘complex prepositional passive’ と呼んでいる。

参考文献

- Denison, David. 1993. *English Historical Syntax: Verbal*. London and New York: Longman.
- _____. 1998. ‘Syntax’, in *The Cambridge History of the English Language*, Vol. IV:1776–1997, ed. Suzanne Romaine (Cambridge: Cambridge University Press), 92–329.
- Jespersen, Otto. 1927. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part III. Heidelberg: Carl Winter.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophilologique.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Phillipps, K. C. 1970. *Jane Austen’s English*. London: André Deutsch.
- Poutsma, Hendrik. 1926. *A Grammar of Late Modern English*. Part II: *The Parts of Speech*. Groningen: P. Noordhoff.
- Quirk, Randolph, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Söderlind, Johannes. 1956. *Verb Syntax in John Dryden’s Prose* I. Uppsala: Lundequistska Bokhandeln.
- Trnka, B. 1930. *On the Syntax of the English Verb from Caxton to Dryden*. Prague: Jednota Československých Matematiků a Fysiků.
- Visser, F. Th. 1973. *An Historical Syntax of the English Language*. Part III, Second Half. Leiden: E. J. Brill.
- 小野 捷・伊藤弘之. 1993. 『近代英語の発達』 英潮社.